



実のなる木

「もうすぐかな」「ジャムにしたら」と会話を弾ませながら、色づき始めた園庭のビワの実を見上げる子どもたち。

実はその頃、遙か天空からそれを同じ思いで見つめる一団がいた。近隣のカラスや野鳥たちだ。今年もビワの実を挟んだ天地の睨み合いが、既に始まっていた。

とを教わったことを実感する保育者だった。(3歳児日誌 6月2日「カラスの分より」)

梅、山桃、ビワ、栗、柿、どんぐり、夏みかん、オリブ、みかん、姫林檎、フェイジョア、ふさすぐり、やまぼうし、桃、レモン…園庭ではたくさんさんの「実のなる木」が、その枝を広げている。

「これ、カラスが怖いんだって」そう言いつて取り出したキラキラと光るテープを枝にぶら下げながら、「これで、下の方は食べられないね。」と呟く保育者。すると、返ってきたその言葉にハツとするのだった。



「これでさ、カラスの分とみんなの分に分けられたね。上はカラスの分だによってカラスもわかるよね。」鳥たちを「追い払う」のではなく、これは「分け合う」方法だと言うのだ。そして「カラスもきつと嬉しいと思うよね。」と続く言葉に、大切なこ

その半分ほどは、毎年、卒園する家庭がその記念樹として植えていってくれたもの。もう園庭の周辺ではこと足らず、畑脇のちよつとした斜面がその受け皿となつて、果樹園への道を歩んでいる。

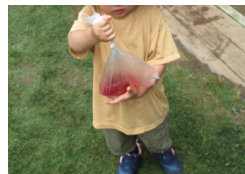
採つては食う…この経験こそが、食育の原点だ。そしてあのビワの木は、食を「分かち合う」という代え難い経験までもたらしてくれた。しかも人と鳥と植物…種を超えてそれを体現する地球規模の食育だ。

さて、日本の園庭の姿形は、学校の校



庭を写し取るかのように、その歴史を歩んできた。学校のそれは体育の授業や集会、運動に広がる敷地の周辺に、鉄棒や登り棒、ジャングジムといった大型の固定遊具が配置されていく。

て、形、色、音、匂い、味、感触、そして生命なるものへの感覚を身体の内へと刻んでいく。そして、それらがどうつながつて、この世がどうやって出来上がったのかを、段々とわかっていくのだ。



と、やがてはそんなガラクタを使って、仲間と一緒に共通のミッションに挑むまでになっていく。

そんな数年間に渡る園庭活動の軌跡は、まるでこれまでの人類が辿ってきた進化のプロセスをなぞるかのようだ。

それを動かしていく、見事な舞台装置…それが園庭だ。

園長 折井誠司

時に「グラウンド」とも呼ばれるこ

いつた構造は、本来なら乳幼児期の育ちには不釣り合いなもので、実はこの時期の彼らに必要なのは、本当の「お庭」だ。そしてそこに置かれるべきは、多様な「素材」。モノと出会わない限り、遊びは生まれないからだ。保育室に玩具が置かれていくように、園庭にあるべきオモチャ、それはなんと言っても自然物だ。

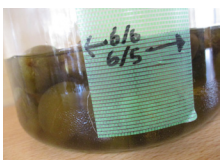
石、砂、土、水、草、花、葉、虫…そしてその中核を担って

くれているのが、あの実のなる木々たちなのだ。そして子どもたちは、そういった素材をいじり倒し探究することを通し



との面白さに気づいていく。知的好奇心を満たしていくわけだ。

そしてモノたちと戯れていく中で、ヒトと関わる楽しさも知っていく



●編集 幼保連携型認定こども園せいび
●発行 折井 誠司
●印刷 折井 誠司
●発行所 幼保連携型認定こども園せいび
社会福祉法人 誠美福祉会
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2
電話 042-675-1155
ファックス 042-677-5643
E-mail seibi@kodomoakyo.jp
http://kodomoakyo.jp